

博士論文（要約）

アルゼンチンの世俗的ユダヤ人における生と探求

宇田川彩

本論文は、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに住まう世俗的ユダヤ人を対象とし、彼らが住まう家という環境と記憶、そして家から出て探求する歩みについて論じる文化人類学的論考である。論文は、大きく二つの部分に分かれる。理論的な問題とともに、本論が議論する対象を呈示する序論の後、第1章から第7章ではフィールドの現実から導き出された問題を理論と照らし合わせながら論じていく。フィールドワークの主要なデータは、2011年1月から、途中一か月程の一時帰国を挟んで2013年2月までの通算24か月間にブエノスアイレスを中心として行った調査に基づいている。

序論では、理論的問題として三つの主題を呈示する(0.1)。すなわち家、記憶、探求である。人が家に住まうという経験とは、環境を知り実践するということと、そこに住まう人びと同士をつながりや土地との関係から理解される。それは、過去・現在・未来という時間性の中にも位置づけられ、ユダヤ的な住まいの特徴である「ディアスポラ」もまたこうした時間性の中で理解される。次に、時間性的問題とともに想起と記憶についての理論的前提を有する。記憶を想起する場所として、本論文では〈家〉に住まわれる記憶とともに、アーカイブに注目している。想起がどのような媒体とともに生じるのか、さらにいかなる範囲で共有されるのかを問うことにより、想起の経験を理解する。最後に、探求とは〈家〉と〈記憶〉について自ら問いかけるところから始まり、自己の問いかけを越えた共同性を生み出していくことを論じる。

以上のような理論的関心は、方法論と不可分の関係にある。文化人類学において一般的に行われるフィールドワーク(参与観察とインタビュー)に加え、書かれたテキストを通じたフィールド経験は本論考にとって不可欠なものである。単に資料収集ではなく、筆者とフィールドの人びとがともに書物を通して経験した出来事が論考の重要な一部を形成したということである。文化人類学における対象としての書物の問題を、ユダヤ教のテキストとともに論じる(0.2)。

第1章「アルゼンチン・ブエノスアイレスにおけるユダヤ人」では、ブエノスアイレスという都市の全容と、1898年に始まるユダヤ移民から現在の多様化に至るユダヤ人の全体像を呈示する。19世紀以降の外国移民の流入によって変容した都市ブエノスアイレスにおいて、ユダヤ人は一面では他の移民集団と同様に「融合」の言説の下にアルゼンチン人として統合されていった。とりわけ住まいと婚姻、スペイン語教育に焦点を当てた時、多くの側面においてユダヤ人はアルゼンチン的な生のあり方に溶け込んでいったと言える。他方で、「融合」という社会的言説は別の側面から見れば国民統合のためのレトリックであったとも理解される。1980年代後半以降、民政移管と多文化主義を契機とし、エスニシティや宗教に基づく差異が語られるようになると、ユダヤ的な独自性や、多様性から成るアルゼンチン性が語られるようになった。

こうした背景に基づき、第一部では、ユダヤ的な住まいとアルゼンチン的な住まいの重なり合う領域としての〈家〉について論じる。家における実践とは複雑な行為の組み合わせから成り立っており、本論文では、家という「全体」を書くという方法によってこうした複雑

性を描き出している。ユダヤ的な住まいの特徴であるとされるディアスポラとは、生活の場における根無し感を意味しない。ブエノスアイレスでの住まいは、人、場所、モノとのつながりをその時々に関わりながら作られるものである。

第2章「言葉とともに食ること——法・伝統・実践」では、家において実践される「法」と「伝統」について特に食と時間性に着目して論じる。私たちが家に住まうこととは、知識、制度、環境を一つの総体として享受し、実践することである。ここで言う知識とは、座学によって得られる類のものではなく、なかば慣習的な身体技法として身につける類のものである。法とはここでユダヤ法を指すが、世俗的なユダヤ人にとってユダヤ法とは参照すべき唯一の規範ではない。アルゼンチン的な世俗性や、「伝統」といった複数の規範の中に実践は立ち現れる。伝統と名指されるのは、近代生活にあって、法とは異なるという否定形によって初めて相対的に位置づけられるユダヤ性のあり方であった。家庭における食とユダヤ暦（安息日や新年といった祭日）は、ある特定の時空間においてこうした複数の規範の組み合わせが実行される契機である。

第3章「儀礼という経験——言葉・モノ・『自由』」においては、過ぎ越し祭という契機に家庭で実践される晩餐に焦点が当てられる。晩餐で用いられる「ハガダー」という典礼書を中心とし、過ぎ越し祭が複数のテキストに取り巻かれていることに注目し、儀礼における「言葉」と「モノ」の関係を主題として論じた。ハガダーのテキストは、儀礼の進行を指示するマニュアルでもあり、出エジプトという神話的過去をめぐる物語でもある。現代アルゼンチンに生きる世俗的なユダヤ人は物語に共鳴しながら、それを神による奇跡ではなく自らの手で自由をつかみ取るという物語へと読み替える。過ぎ越し祭の食卓の会話や自己省察の文章には、ハガダーに書かれたフォーマットすなわち〈問い－答える〉という形式が繰り返される。テキストが儀礼において一方的に行方を規定し、モノとのかかわりを指定するのではなく、物語をめぐるモノと、語りのフォーマットが互いに儀礼という経験の全体を作り上げる。また過ぎ越し祭の儀礼的反復は、食べものや身体的動作を通じた神話的過去の再現として、記憶論にも位置づけられることもできる。

第二部〈記憶〉では、どのような媒体によって記憶が喚起され、その記憶は誰とともに共有されるのかを問う。

第4章「記憶とともに住まう——想起・イメージ・継承」は、〈記憶〉を主題としながらも、〈家〉というテーマを引き継いでいる。家族写真を飾ることと家族史を書くことに焦点を当て、イメージによって喚起される記憶と書かれた物語によって喚起される記憶との関係について論じた。これらの想起の媒体は、第3章で論じた身体的、儀礼的想起と同様に日常的な空間に基づいている。家族をめぐる記憶は、かけがえのない個人によって身体的に経験されるものである一方で、普遍的な集合的記憶として共有される可能性もある。家、写真、書かれた物語といった想起の媒体は、それぞれに異なる範囲で記憶を想起させる。そのいくつかの組み合わせを通じ、ユダヤ的な記憶のあり方を呈示する。

家を舞台とした記憶について論じた第4章に対し、第5章「アーカイブは誰に開かれて

いるか——『私たちの記憶』の在り処」ではアーカイブという媒体に着目し、誰がどのような場面でアーカイブを必要とするのかを問いながら、より大きな集団の枠組み、すなわち「ユダヤ人」の記憶を再考した。ブエノスアイレスの東欧系ユダヤ人のアーカイブであるIWO（ユダヤ科学研究所）は、1994年のテロによる破壊の危機によって重要性を認識され、ユダヤ人の記憶を救出するというプロジェクトが立ち上がった。本論文の事例においてアーカイブは、蓄積される情報自体の重要性よりも、むしろその存在が継続されること、そしてすでに潰えたかに見えたイディッシュ語を中心とした東欧系ユダヤ人の文化を継承するという同時代的な社会背景に基づいて要請された。過去から現在にかけて収集・蓄積された情報を集めた場所であるアーカイブに「真実性」を認める人びとにとって、過去についての知識とはすなわち現在の自身に関する真実を見出す参照点も意味する。

さて、以上第二部までの議論は、儀礼と書物、記憶の継承といったユダヤ的な文脈を矛盾なく継承してきたとも言える。これを踏まえ、第三部においては、〈探求〉を主題として、これまでに論じられてきた言葉とモノとの関係や、言葉とモノが組み合わせられた実践の空間としての〈家〉があらゆる側面から逆転される。

第6章『『人生の意味を求めて歩く者』——探求の共同性』では、「集いの幕屋」という小規模グループにおいて、儀礼的な形式性におけるテキストと行為との一致が否定され、またユダヤ人の定義も覆される。ユダヤ教や、ユダヤ的な規範と考えられてきたものは、ユダヤ的なものに類似した実践、あるいは換骨奪胎された思想に変換される。ユダヤ人であるという変更不可能なアイデンティティと見えたもの、あるいはユダヤ人になることをめぐる困難さは取り払われる。ここで探求とは、〈家〉において無意識に反復されてきた実践から出ようとする事、そして〈記憶〉を継承する重荷からも逃れた「自由」を得ることであった。

第7章『『本は重い』——言葉・モノ・声』では、ユダヤ教の典礼書を手放し「捧げる」という「集いの幕屋」独自の儀礼を通し、こうした探求の方法が供犠劇の形で先鋭化された事例について論じる。集いの幕屋においては、書物とは重たく、自らの声は抑圧されたものと考えられる。しかし自らを取り巻く環境として否応なしに書物の存在する世界にあって、声を見出すこととは書物との関係を切り離すことを意味するのではなく、関係を結び直そうとする探求であった。

ユダヤ人であることは、生まれた時から死ぬまでの間引き受けざるを得ない「私の身体」であり、引き受けるという受動性の感覚（そして重さの感覚）が本論文を貫いている。しかしながら、不安定さとも、あるいは軽やかさとも呼べる、重さと軽やかさの両面性を持ちながら、重みを確認し、立ち止まって行先を確認しながらまた歩いていく探求の姿が、アルゼンチンの世俗的ユダヤ人の住まい方であると言える。

（5年以内に出版）